

未来の語り方と 社会デザインの課題

東京大学大学院法学政治学研究科・
公共政策大学院

城山 英明

2019年3月8日

SDGsは社会像か？

- ウィッシュユリストとしての側面－相互矛盾の可能性
- 他方、隠れた意義－SDGs間の思わぬつながりはある
－co-benefits（同床異夢）－発見と連携の契機
- 例：気候変動対策は重要だが、あくまでも課題の1つ
- 同床異夢で両立を図りつつも、どこかで価値判断を求められる
- 価値判断セットとしての社会像を語る必要
－例：行動のトレーサビリティをめぐるinclusiveness（信用供与等）とプライバシーのトレードオフ

「Society 5.0」は社会像か？

- 第5期科学技術基本計画：ICTを最大限に活用し、サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）とを融合させた取組により、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来社会の姿として共有し、その実現に向けた一連の取組を更に深化させつつ「Society 5.0」として強かに推進
- 未来投資戦略2018：第4次産業革命の社会実装によって、現場のデジタル化と生産性向上を徹底的に進め、日本の強みとリソースを最大活用して、誰もが活躍でき、人口減少・高齢化、エネルギー・環境制約など様々な社会課題を解決できる、日本ならではの持続可能でインクルーシブな経済社会システムである「Society 5.0」を実現するとともに、これによりSDGsの達成に寄与
- 基本的には融合技術という手段に関する議論
- 社会のあり方の議論不可欠（技術活用が自己目的ではない）but不明確

未来の語り方

- データが存在するのは過去の一部の事象
 - －EBPM (evidence based policy making) の限界
- 未来に関するエビデンスをいかに確保するのか
 - －社会実験シミュレーション
 - －ステークホルダー分析、ethnography
- 未来をデザインする際の価値の重要性
 - －参照対象としての歴史
- 複数の語り方ートップダウンとボトムアップ
 - －目標設定とバックキャスト
 - －多様な未来の可能性としてのシナリオ
- 現場の多様な兆しに目配せしつつプロトタイプを実験しつつ修正するagileなデザインの可能性
 - －兆しに気付かせる契機としてのSDGs

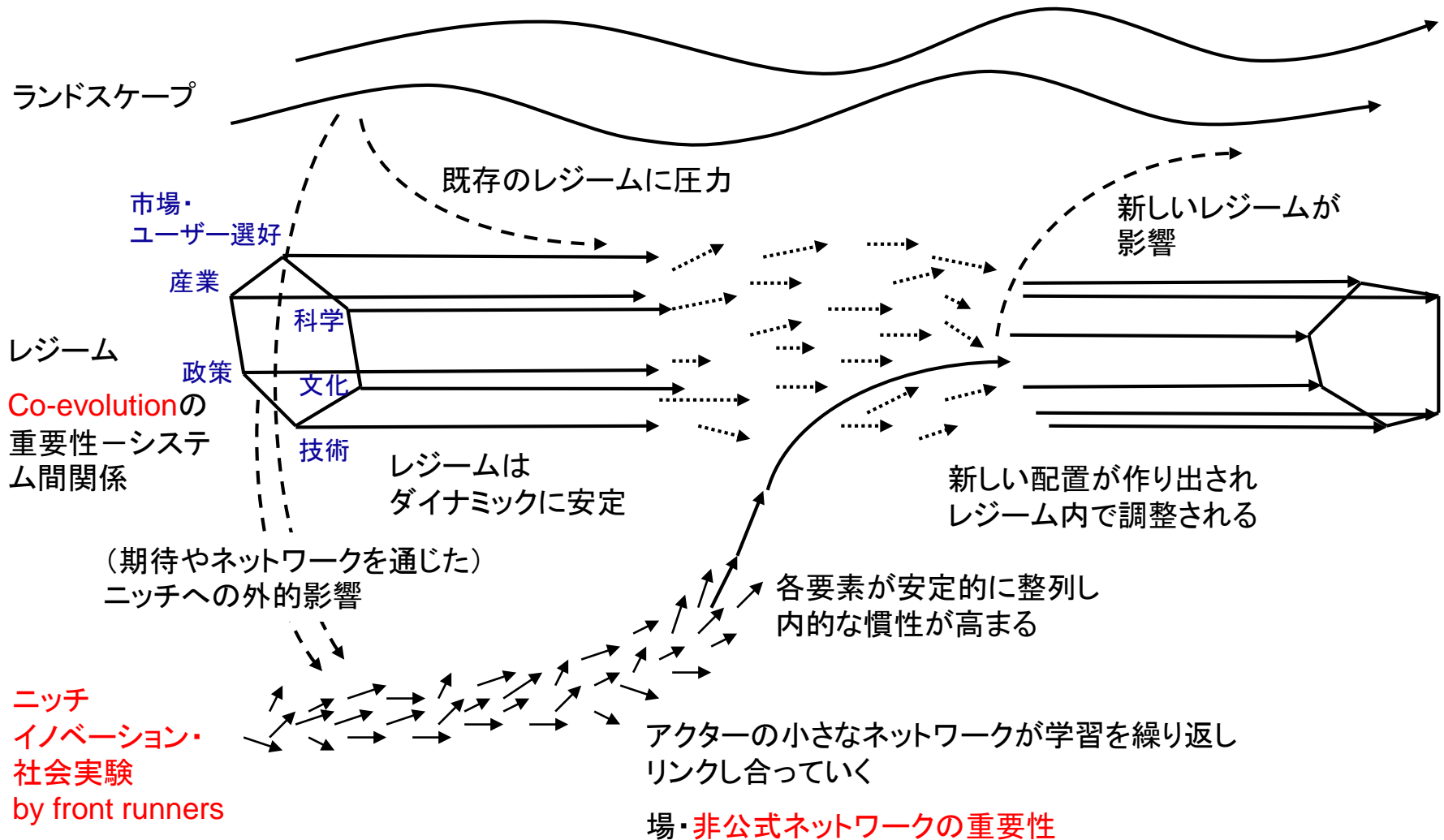
シナリオ分析

- トрендではなく幅広い不確実性に着目 \longleftrightarrow 確率論
- 鍵となるドライバーの選択
- 多様なステークホルダー、専門家等の参加
- ステークホルダー分析2. 0への可能性？

制約条件やそれへの解は何か？

- **トレードオフ**
- **トレードオフを解決するものとしての技術革新、協力（信用・平和）**
— いずれもwin-winを創出
- **もう一つのドライバーとしての価値の変化**
- **不確実性**は制約条件か促進条件か
- **技術と制度**（社会技術）をセットで扱う必要
— 例：データ契約
- **対応手法としての移行管理**（トランジションマネジメント）
— 選択的参加（front runners）の重要性

移行管理の多層的ダイナミクス



Source: Geels (2002: 1263)

学術研究の役割

- Universityという場
 - －分野横断的な議論の場
 - －Transdisciplinaryな議論の場－社会のアクターもここに連れてくる
cf. 限られた狭い世間であることも認識する必要
- 大学と市民社会との関係以前に大学内で分野間の対話ができる必要
 - －異なることを公衆に発信し、信用を失うリスク
 - －大学はある種の横断的協力のトレーニングの場
- 社会との2つの距離感
 - －社会の課題解決：knowledge creation → knowledge implementation
 - －社会におけるアジェンダ設定：現代版の啓蒙
- 必要条件としての研究者という社会的アクターのインセンティブ・キャリアパス
 - －評価基準も変えていく必要
 - －IFIのような組織にはピン止めとしての役割も